
シンデレラになれなくて

緋天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンデレラになれなくて

【Nコード】

N8588H

【作者名】

緋天

【あらすじ】

「嫁に行け」と王である父に告げられたパーティア国の第一王女、クリスティーナ。意を決し、結婚を逃れるために城を抜け出した先に待っていたものは……。自らの運命を変えるために城を抜け出したお転婆王女がその先に待ち構える出来事を経験し、運命を掴み取るお話です。

0 話・プロローグ

もうすぐ・・・

あとちょっとで抜け出せるわ・・・

絡みつく木々の枝葉が体に傷を作っていく。

しかし、そんなことを気にしている余裕はない。

一刻も早くこの森を抜け出さなければ私はすぐに連れ戻されてしまう。

『クリスティーナ、嫁にいくのじゃ』

不意に父様の言葉が脳裏をよぎる。

いやよ、いや！

あたし、まだ16歳よ。

嫁に行くなんて早すぎるわ。

『お前と国のためじゃ。国にとってシリア王国と結ばれることは大きな利益となる。もちろんお前にとってもとても良い縁じゃ。かの

国の王子は誠実な者であると聞いておる。きっとお前を大事にするであろう。国の財政も安定しておるしお前は何の不自由もないだろう。これ以上良い縁談はもはや無い。クリステイーナ、何が不満なのじゃ。』

不満！？

不満なんてありすぎて全部言い切れないわ！

『しかし、これは既に双国の間で決定していることじゃ。シリアの王子もお前で良いと言っておる。お前に拒否はできない。』

なによそれ！

父様なんて大っ嫌いよ！

心臓が早鐘を打っている。

肺が上手く酸素を取り入れてくれない。

苦しい・・・

あとちょっと・・・

あと少しだけ・・・

そうすればきつと逃げ切れるわ。

「がんばって、シルヴァン。あと少しで森を抜けるわ。」

前方に白い光が見えてきた。

そこを目指して愛馬に跨り全速力で森を駆け抜ける。

私だって一国の王女。

国のためにより大国と、より国に利益をもたらす所と縁を強くするために心を伴わない結婚だってしなくちゃいけないってわかってるの。

わかってるのよ。

だけど、生まれてこの方ずっと城の中。

出会う人は皆私を王女として扱うの。

「パルティア国の第一王女でいらっしゃるクリスティーナ様は」ってね。

甘い恋だったことがない。

ずっとずっと、夢だったの。

おとぎ話の、そう、シンデレラのように甘い恋を試みたいって。

だから私は逃げ出すの。

あんな城の中にもシンデレラになんてなれないわ！

あの光に届けば・・・

届けば、きつと私も・・・

「シルヴァン、やったわ・・・」

柔らかい光が体を包み込む。

やっと、やっと城から抜け出せた。

張り詰めていた緊張の糸がプツリと切れる。

ふと気を緩めた途端に世界は暗転し、意識は真っ暗な闇に落ちていった。

1話・出会い

「ん．．．う．．．」

目覚めると白い天井が目に入った。

どうやらベットに寝ていたようだが．．．

いつもの見慣れたものではない。

ここは．．．どこだろう。

えっと．．．

お嫁に行かされそうになって家を抜け出して、シルヴァンに乗って城敷地内の森を出た．．．

ん．．．？

．．．シルヴァン？

「シルヴァン！」

ああ！私ったら！

大事なシルヴァンのことを忘れてしまっていたなんて！

シルヴァンは何処！？

綺麗で賢い馬だもの。

まさか、盗賊に浚われてしまったのかしら！

っていうか、ここは何処なのよ！？

もしかして私の方が浚われたのかと思って周囲を探ってみるが、見たところ監禁する倉庫のような感じはしない。

むしろ、白を基調とした家具でまとめられていて清潔感がある。

自分のいるベットの横には小窓があり、やわらかい日の光が降り注いでいる。

森を走った時に付いたであろう体の傷はすでに手当してあった。

シルヴァンを探さなくちゃ・・・

痛む体に鞭打ち、ベットから降り小走りで部屋の扉へと向かった。

勢いよく扉を開けようとすると、

「おっと・・・」

突然目の前の扉が勝手に開いたと思うと、入ってきた人物にぶつかってしまった。

「大丈夫か？」

転ぶ！と思ったが衝撃はいつまでたっても来ず、背中はしっかりと目の前の人物の腕で支えられていた。

「ごめんなさい！支えてくれてありが・・・と・・・う」

礼を言いながら慌てて顔を上げると、そこには吸い込まれそうな青い瞳があつた。

「ああ、目が覚めてたみたいだな。何をそんなに慌てているんだ？お前はまだ寝てなきゃいけないぞ」

そう言つと、青年はそのまま私をひょいっと抱えてベッドに連れ戻してしまつた！

2話・うるうる涙目作戦

「俺はアレックス。ただの旅人さ。たまたま王城の森近くで休んでいたら、突然黒い馬が現れたんだ。よく見たら人を乗せていて、そいつは気絶してるし、慌てて近くの村まで連れてきたんだ。お前、名前は？」

そっか・・・

あたし、森を抜けてすぐに意識を失ったのよね。

いまのアレックスの話からすると、どうやら気絶した主を乗せたままシルヴァンは助けを求めてうるうると彷徨っていたようだ。そこをこの人が見つけて助けてくれたのね。

見た感じ、私の身元を知っているようでもないし、本当に善意で助けてくれたみたいだ。

「本当にありがとう。私の名前は・・・ティナ。ティナよ。ところで、その馬は今どこにいるのかしら。私の大切な友達なの。」

するとアレックスは、ああ、と頷いた。

「その馬なら今はこの宿の隣にある馬小屋で俺の相棒と一緒に休ませてるよ。だいぶ疲れていたようだっし。」

ところでお前はどうしてあそこで気絶していたんだ、なんてことを尋ねられたけれど盗賊に襲われて必死に逃げていたの、とうるうるの涙目光線付きの顔で適当にごまかした。

だって結婚するのが嫌で家出てきました、なんて言えるわけないじゃないの！

話した途端に城に連れ戻されるのがオチだわ。

それに、父様の放った追っ手もきつと私がまだ城からこんなに近い場所に居続けているとは思ってもみないわ。

あぁん、でも油断はできないわ。

父様のことだもの、まだこの辺にも近衛騎士をつろちよろさせてるに違いないわ！

どうすればいいのかしら・・・

3話・そんなこんなで

そんなこんなで、私が拾われてから5日が経った。

私が拾われた日、アレックスは親切なことに

「俺もあと一週間くらいここに滞在すると思うから、粗方の怪我が治るまでこの部屋使っていていいぞ。俺はソファークベツトで寝ればいいし。」

なんてことを言ってくれた。

もちろん、私は断ったわ。

これからどうしよう、って考えていた矢先のこの言葉はまさに天から手を差し伸べられたように感じたわ。

だけど、アレックスをソファークベツトで寝かせるわけにもいかないでしょう？

アレックスはアレックスで怪我をしているんだからちゃんと治せって言っし。

それで揉めていたら宿主さんが簡易ベツトを用意しましょうかって申し出てくれたの。

それで一先ず解決。

私も宿にいさせてもらえることになったの。

5日が経ってもともとそんなに大きな怪我も無かつたし、体中の傷も大分治ってきた。

はじめの3日は宿のお風呂に入るたび地獄だったけどね・・・

お湯が傷に当たるたびに染みるのが半端なく痛くて「ぐあー」って叫んだら、叫び声を聞きいたアレックスが慌てて駆けつけて来ちゃったの。

だって痛かったんだもの。

ピリピリする、なんてものじゃないのよ！

全身が針で刺されているように痛いんだから！

でも、そんなアレックスも3日目には慣れたみたいで、見向きもしなくなっちゃったわ。

つーまーんーなーいー！

もしお風呂場の扉を開けたりなんかしたら、洗面器を思いっきり投げつけてあげようと構えてたのに。

4話・押して押して！

「なあ、俺、そろそろここを出るつもりだけど、お前は どうするんだ？」

6日目の朝、アレックスはそう切り出した。

うーん・・・

どうするのかしら。

城にはもちろん帰れないし、かと言って行くあてもないのよね・・・

だって私、城からほとんど出たことがないのよ。

城にはなんでも揃っていたし、買い物だって私が行ったりするなんてことは有り得なかったもの。

はーあ・・・

困ったなあ・・・

黙ったままの私を見かねたのか、アレックスは「お前、家は？」と言ってきた。

家・・・ねえ・・・。

これはまた適当に誤魔化すしかないわよね・・・。

「あの、ね、アレックス。私、盗賊に襲われたって言ったじゃない？ それ、村ごと襲われたの。それで逃げただけど、何故か私だけ執拗に追われて・・・。どうやってか、村からずっと追いかけてく

るの。それでついこの間もまた追いつかれて、命からがら逃げていた所でアレックスが助けてくれたみたいなの。でも、怖い。家に帰ったらきつとまた捕まって売り飛ばされてしまっわ。帰りたくない・・・」

上目遣いでアレックスを見上げてみる。

最近一緒にいて、アレックスは結構押しに弱いことがわかった。今だって「うっ」ってなってるもの。

あと一押しね・・・

「ねえ、アレックス。一緒に連れて行ってくれないかしら。」

お願い、と懇願してみる。

私ってば女優になれちゃうかもしれないわ。

この作り話だって強^{あなが}ちウソじゃないし。

だって結局は知らない人の所に嫁に行くってことは売り飛ばされちゃうことと同じじゃない？

ちよっと規模が大きくなって国の話っていうだけの違いよ。

「アレックス・・・？」

返答を渋るアレックスを呼んで催促してみる。

「わぁーったよ。連れて行ってやるよ。」

渋々といった顔で了承の言葉を口にするアレックス。

「本当！？ありがとう！」

騙しちゃってごめんね。

いつか事が片付いたら、きちんと説明するから。

5話・旅支度

明日の朝に出る、とアレックスに言われていそいそと荷造りを始めた。

・・・なんて言ってもほとんど着の身着のまま城を出てきちゃったからそんな荷物はないんだけどね。

服は、メイドの私服を頂戴してきたから動きやすいものを買ってもらった。

「ねーえ、アレックス。次は何処に行くの？」

「ロゼの町だ。ちょっと遠いから今のうちしっかり休んでおけよ。」

ロゼはここから小さな村を1つ挟んだ先にある、少し大きな町なの。商業が盛んで、王都との交流も深い。

気をつけなくっちゃ。

ロゼは大きな町だから、きつと近衛騎士もいるわ。

見つかったら連れ戻されちゃうわ！

「シルヴァンっ！」

荷造りを終えた（するほどの荷物も無かったんだけど）私は、久しぶりにシルヴァンに会おうと宿に隣接されている馬小屋に来ていた。

「ごめんね、シルヴァン。すぐにここに来てあげられなくて。元気にしてた？」

アレックスが許してくれなかったの、そう口にしながらシルヴァンの頭を撫でると、シルヴァンも甘えるように鼻先をすり寄せてくる。

シルヴァン～

会いたかったわ～

と、ここで再会のハグ。

互いの存在を確認しあうの。

「あの時、気絶した私をアレックスのところまで運んでくれたのよね。ありがとう、シルヴァン。あなたは自慢の友達だわ。」

シルヴァンに回していた腕をそつと離しながらこう言うと、シルヴァンは誇らしげにブルブルと体を震わせた。

わが友との久々の再会に思わず時を忘れてじゃれ合っていたら、アレックスが夕食だと呼びにきた。

私ってばどれだけ夢中でシルヴァンと話していたのかしら！

「じゃあ、私は宿に戻るわ。明日から旅になるけれどよろしくね、シルヴァン。」

最後にシルヴァンに声をかけて馬小屋を出る。

外にはアレックスが待っていて、

「待っていなくても良かったのに。大丈夫よ。」
と言ったら、ちょっとは用心しろ、と怒られた。

宿はすぐ隣なのに。

うーん・・・

アレックスって心配性なのかしら。

6 話・相棒（前書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。

こんな勝手気ままな作者の駄文でも楽しいとコメントをくださる方がいらつしゃり、とても励みになっております。気のままに小説を書く私は、皆様の投票、評価、メッセージによって志気を上げております。嬉しさのあまり更新の回数アップにも繋がりますので、ポチっとランキングを押ししたり、コメントを送って下さると幸いです。

6 話・相棒

うゝ・・・

お尻、痛い・・・

私は今戦ってる。

何とかって？

お尻よ、お・し・り！

今朝、村を出て早3時間。

私たちは次の村とちょうど中間地点に位置する森（いや、城の森ほどじゃないし、どっちかと言うと林に近いんだろうけど、やっぱり森？ などところ）をそれぞれの馬に乗って走っている。

トコトコとゆっくり移動する感じで全然激しい揺れはないんだけど、でもね。

いくら乗りなれているシルヴァンの上だからって、こんなデコボコ道ばかり3時間も走っているとそろそろお尻も痛くなってくるのよ。

「おい、少し休憩するぞ。」

前を走っていたアレックスがそう声をかけてくる。

神様、仏様、アレックス様

あのいつも偉そうで強情で心配性なアレックスが天の使いのように思えるわ！

しばらくキョロキョロと休めそうな所を探していると、すぐにちょうど良い場所を見つけたことができた。

傍らには湧き水の溜まった泉もあるから馬たちも水が飲めるし、休憩には最適だ。

やっとお尻の痛みから解放されるという喜びで胸を躍らせながら、
いそいそと馬を下りる。

「シルヴァン、ありがとう」

もちろん彼を労うことも忘れずに。

あ、今さらって言ったけど

シルヴァンって男の子なのよ。

そしてアレックスの馬は女の子。

名前はセリーン。

茶色の毛並みの人懐っこい馬で、とーっても可愛いのよ。

一度アレックスにセリーンのことを尋ねたら「こいつはすごく賢
いんだ。」と少し誇らしげに言っていた。

セリーンに話しかける時なんかも「よう、相棒」なんて感じだから、
すごく大事にしていることがわかる。

私とシルヴァンの間のものと同じような絆を見つけて、なんだか胸
が温かくなった。

6 話・相棒（後書き）

このところ連日更新させていただきましたが、これからは週一を目標に更新させていただきます。

なにとぞご理解のほどをよろしくお願いいたします。

7話・ああ、神様

私たちは休息を終えて、再び森の中を進んでいた。私はまた長時間の乗馬になるだろうことを考えて、少々・・・いや、かなりげんなりしていた。

「止まれ」

不意にアレックスがそう呟いた。

突然の静止の声に怪訝そうな顔をする私に、彼は近寄ってきた。「動くなよ」と声をかけてきた。

「隠れてないで、出て来いよ」

目の前の草むらに向かって彼は言う。

すると、わらわらと5・6人の盗賊の身なりをした者が一斉にそこから辺から出てきて、私たちを囲んできたのだ。

「おいおい、兄ちゃんよお。なかなか良い勘してんじゃねえか。だけどな、運が悪かったぜ。なんだって俺たちの餌食にされちまうんだからな。」

げへへへ、と男たちは下品な笑い声をあげている。続けてリーダー格の男が口を開く。

「兄ちゃんよ、金目の物を置いてとっとと失せな。今なら特別に逃

がしてやるぜ。命が惜しいもんなあ？俺って寛大だろう？おーっと、そこのお嬢ちゃん置いてけよ。俺たちが可愛がつてすっかり躡けた後にご主人様の元へ売ってやるからな。その頃にはきつと従順に腰を振って啼くイイ女になつてるだろうよ。」

・・・中身もしっかり下品だった。

なによ、この人たち！

とっても嫌なかんじ！

ただどこっちは普通の青年とか弱い少女の二人に対して向こうは大勢、尚且^{なおか}ついろいろと武器を持ってるし、場数もそれなりに踏んでいるみたい。

アレックスは武器を持っているようには見えないし、そもそももちろん私は戦力外なわけだから、アレックス一人でこの人数を相手をするなんて無理だわ。

どうしよう・・・。

このままだと本当に男たちの餌食になつてしまつわ。

そう思うと背筋がぞつとしてガタガタと体の震えが止まらない。

怖い・・・

やめて・・・っ

結婚から逃げたのがいけなかったの？

ああ、神様。

・ わたしはただシンデレラのような甘い恋がしたかっただけなの・・・

8話・息を呑む間の出来事

それはあつという間の出来事だった。

「・・・る・・・」

ボソッと目の前のアレックスが呟く。

その声はあまりにも小さくて一番近くにいた私でさえも聞き取れなかった。

「ああ？何か言ったか？」

「聞こえねえんだよ！」

——チツ

一瞬、目の前から舌打ちが聞こえた気がした。

あれ。アレックスさん？

アナタ、そんなキャラでしたっけ？

「うつせえな。断るつつってんだろ」

ひらりと軽やかに馬から降りたアレックスはニヤツと笑って強気な発言をする。

「んだと！？なめんじゃねーぞ！」

当然、挑発された男たちは顔に血を上らせる。

「かかれ！野郎ども！」

「頼むぞ、相棒」

男たちの怒声と同時にアレックスはセーラに声をかけると、地面を蹴り上げ、男たちの中へ飛び込んでいった。

アレックス・・・っ――

はっと息を呑んでいる間には既にすべてが終わっていた気がする。

駆け出したアレックスはまず最初に向かってくる相手をすばやくかわす。

そして、そのまま回し蹴りでなぎ倒した。

その後すぐにしゃがんで挟み撃ちで襲ってきた男らの攻撃をやり過ぎす。

流れるようにその体勢から相手の腹に拳を打ち込む。

そんな風にしてアレックスに目を奪われていた私は、こちらに向かってきていた男に気がついていなかった。

直前で気がついたものの、対応は間に合わず、やばいっ・・・と思った束の間、「ぐえっ」と男の奇声が聞こえたかと思うと、セリーンの見事な蹴りが決まっていた。

「ありがとう、セリーン。」

と、ここでセリーンと微笑みを交わし、再びアレックスの方へ目を向ける。

アレックスはすでに4人目の男の持っていたナイフを奪い、リーダー格の男と対峙しているところだった。

さすがにリーダーはちょっと手強そうだ。

互いに距離を保ち、睨み合っている。

数秒の後、相手が先に動き出した。

すかさずアレックスは手にしたナイフを男に投げる。

そして自分は体勢を低くして走り出し、飛んできたナイフに怯んでいた男の鳩尾に拳を入れた。

「ぐほ・・・っ」

男の口から体液が飛び出る。

「獲物の力量くらい見切れよな」

当のアレックスは見たところかすり傷ひとつ無く、散らばっている男たちの残骸を横目に、パンパンと手の汚れを払っていた。

あら。

リーダーって実は弱かったのかしら。

・・・そんなわけないわよね。

9 話・私の決意と彼の葛藤

「・・・アレックスって。実は強かったのね。」

ぽつり、と呟いてみる。

途端にアレックスが『急に何言っただコイツ』って目で見てきた。

そ、そんなに呆れた目で見なくなっただいいじゃない。

「だって、一人であんな大勢に勝てるなんて思っていなかったんだもの。何かやっていたの？」

も一回トライしてみる。

うるさい女って思われちゃうかしら。

そんなことをぐるぐると頭の中で考えていたら、不意に返事が返ってきた。

「ガキの頃に護身術としてちょっとかじっただけさ。それに、旅なんてしてたらあんなの日常茶飯事だしな。」

「ふーん・・・。」

そう返事をして、ぐるぐると頭の中で考えはじめる。

日常茶飯事って・・・。

じゃあ、旅をしていればまたあんな風に襲われたりするかもしれな
いってこと？

そしたら、今度こそ・・・。

私は運動もそんなにしたことがないし、もちろん剣なんて持ったことも無い。

自分を守る術なんて何ひとつ持ってないわ。

このまま旅を続けるとして、ずっとアレックスに守ってもらうの？

「私も剣をするわ」

「・・・は？」

唐突にそんな言葉を発すると、案の定アレックスは何か不思議なものを見るような目で眺めてきた。

「アレックス、私に剣を教えて。」

言ってみてから決心がついた。

自分の身は自分で守れなくちゃ。

ただでさえアレックスに迷惑ばかりかけているのに、これ以上足手まといにはなれないのよ！

「・・・嫌だ。」

あっさり承諾してもらえと思っていたのに、即効で断られた。

「なんでっ！？またさっきみたいなのに襲われたら、私だって守ってもらってばかりはいられないでしょう？」

「あんな奴ら、俺一人でも十分だ。」

「じゃあ、アレックスがいけないときは？いつも私のそばにつきつきりなわけにはいかないでしょう？」

反論に反論を重ねているとアレックスはあ、とため息をついて諭すように言った。

「・・・剣を扱うってことは、そう簡単じゃないんだ。お前に剣は振り回せない。」

これにはさすがにむっとした。

「最初から決め付けないで！私だってやれるわ！」

「そういう意味じゃない！俺はお前の手や身体が――」
・

「・・・なによ？」

「・・・いや、なんでもない。」

「じゃあ、教えてくれるの？」

改めてこう問うと、アレックスは頭の中での葛藤を振り払うように一瞬目を細め、やがて「わかった。教えてやるよ。」と言った。

10話・私と夕日と星と（前書き）

更新が停滞しておりました。

申し訳ございません。

今後は『dolce』と並行して更新していきたいと思っておりますので、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

10話・私と夕日と星と

そんなことを話しているうちに、私たちは森を抜け、小さな村にたどり着いた。

アレックスは手馴れたように宿を手配し、今日はもうここで休むぞ、と言った。

あたりはすでに夕暮れ。

家々は夕焼けでオレンジに染まっていた。

それを今、私は宿の窓から眺めている。

パルティア城のバルコニーから眺める夕日もきれいだっただわ。

民衆の家が立ち並ぶ場所より少し高い所に位置する白亜の城。

下を見下ろせば賑やかな市場が広がっており、そこは毎日笑顔で溢れていた。

民は皆父様のことを信頼し、慕っていて、そして、いつもはちよっぴり天然ボケな父様も民衆の前では威厳のある国王の顔をしていて、すごくかつこよかった。

そんな父様を尊敬し、憧れていた。

父様の隣にはいつもにこにこ優しい顔で微笑んでいる母様がいて、兄様もいて。

とても、とても幸せだった。

どうしてこんなことになっちゃったんだろう。
じわり、と涙があふれてくる。

父様、母様、兄様、みんな……。

ひどく感傷に浸っていて、カチャリとドアを開けてアレックスが部屋に入ってきていたのに気がつかなかった。
気づいたときには、既にアレックスは隣にいた。

やばっ！涙を拭かなくちゃっ！

慌てて目をゴシゴシと擦ったら、腫れるぞ、とアレックスに手を取
り上げられてしまった。

「家のことを………考えていたの。」

「寂しくなったのか？」

「……ううん。」

寂しい。

「帰りたくなつたのか？」

「………ううん。」

帰りたい。

でも、帰りたくない。

「そうか。」

アレックスは他には何も言わずに、ただ、ぽんぽんと私の頭をやさ
しく撫でて、そして部屋を出て行った。
その手には、確かなぬくもりを感じた。

残ったのは私だけ。

その私の頬が薄く染まったのに気づいたのは、沈みゆく夕日と空に
光る星だけだった。

10話・私と夕日と星と（後書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。

こんな勝手気ままな作者の駄文でも楽しいとコメントをくださる方がいらつしやり、とても励みになっております。気のままに小説を書く私は、皆様の投票、評価、メッセージによって志気を上げております。嬉しさのあまり更新の回数アップにも繋がりますので、ポチっとランキングを押ししたり、コメントを送って下さると幸いです。

11話・無重力世界

ふわふわと無重力世界を漂っているようだった。

『・・・クリス、クリスティーナ・・・』

どこからか声がする。

柔らかくてあつたかい。

兄様が呼んでるのかしら。

「ん・・・な・・・に・・・に・・・さま」

私はまだここにいたいわ。

だってすごく居心地がいいのよ。

『ゆう・・・だ・・・きろ。』

兄様？

何を言っているのか良く聞こえないわ。

『クリス・・・』

なあに。

兄様、私はここにいたい。
しつこいわよ。

「い・・・や・・・っ」

すると、どうだろう。

しつこいくらい私を呼んでいた兄様の声は聞こえなくなった。

変わりに、やさしく頭を撫でられている感じがする。

その手はとても愛しげに私に触れていて、すごく気持ちがいい。

その心地よさに惹かれて、ずるずると深いところに堕ちていきそう。ほら、だんだん意識がフェードアウトしていく。

深い海の底に意識を落とす直前、くちびるを何かやわらかいものが掠めていった、ような気がした。

窓から降りそそぐ光に誘われて、ゆっくりと覚醒する。

あら。

昨日は夕日を見て。

城のことを思い出して。

家族と離れて寂しくなって泣いちゃって。

……それから、寝ちゃったみたいね。

そんな私はきちんとベッドの上にいて。

きつと見かねたアレックスがベッドまで運んでくれたのね。

——アレックス。

昨日の夕、アレックスに頭を撫でられたことを思い出す。

あれは、言外に慰めてくれたのね。

・・・慰めてくれただけよ。深いイミなんてないわ。

そう自分を叱責するも、心臓はバクバクと己を主張し、顔はどんどん赤くなって火照るばかり。

おまけにきゅうっと肺が詰まって息ができなくて苦しい。

私ったら、どうしちゃったのかしら。

そんな自分の状態に戸惑いつつも、頭の片隅に残った冷静な自分が身体の火照りを醒まさねばという考えにたどり着き、頭を冷やすためにするりとベットから抜け出て浴室へ駆けていった。

11話・無重力世界（後書き）

感想をいただければ幸いです。

12話・いつもの朝とちがったわたし

湯浴みをすませて出て行くと、アレックスはすでにそこにはいなかった。

代わりに机の上にはメモが一枚。

『朝食、先に下に行って待ってる』

ですって。

こんな紙切れ一枚ですごく心が満ち足りた気分になってくる。
どうしてかしら。

なんだか早くアレックスに会いたいわ。

私たちが泊まっていた宿は、一階が大衆食堂になっている。

混雑している店内ですぐに見つかるアレックス。

彼のまわりはそこだけスポットライトが当たっているみたいに輝いていて、どうにもまぶしい。

いそいで駆け寄ると、私に気づいてふっと目を細めた。

「おはよう。」

「ああ。」

そっけない返事。

いつもはもつときちんと挨拶を返しなさいよって思っていたけど、
なぜだか今日は気にならない。

むしろなんだかくすぐったくて、気を抜いたら心臓が勝手に踊りだ
しちやいそう。

そうこうしているうちに、おばさんが朝食を運んできた。

「はいよ、お待ち。お前さん達はうちの宿泊客だね？人が多くて悪
かったね。騒がしいだろう？」

おばさんが少し申し訳なさそうに言う。

そんなこと全然気にしてないのに。

だから、「お店、繁盛しているんですね。」って返事をしたら豪快
な笑いが返ってきた。

小さな村の、小さな宿。

そこは、宿に泊まっている宿泊客はもちろん、村民も食事をしにや
ってくる。

特にお昼時は一斉に客がやってきててこ舞いなさ、と宿のお
ばさんがやっぱり豪快に笑いながら話してくれた。

午後は、買い物に行った。

これから向かう予定の口ゼは、この村から二日進んだところに位置
する。

そのため、ここを出発したらあと二日は野宿ということになる。

進路には特に危険な場所があるわけでもなく、辺りを国営警備隊が

警備のために巡回しているのでめったに盗賊などが出没することもない。

ここに来るのに通った森のほうがよく危険なくらいだ。
でも、食料だとか、やっぱり必要なものがあるから。

そうやって斜め前を颯爽と歩くアレックスの背中からは、広がって大きかった。

12話・いつもの朝とちがったわたし（後書き）

感想・評価お待ちしております。

誤字脱字などございましたら、ご指摘いただけると幸いです。

13話・遠足前夜（前書き）

更新が滞っております、申し訳ありませんでした。

最近執筆不調が続いております、読者の皆様にお見せできるような作品ができません。しかし、活動は続けておりますので、カメのようなのろのろペースの更新になると思いますが、これからもうどうぞよろしく願います。

13話・遠足前夜

「水でしょ、食料でしょ、マントに寝袋に、それから・・・えつと・・・」

いちいち声に出して持ち物を確認する。

一時間前からはじめて、かれこれ三回目の確認だ。

「えつと、えつと・・・、あとは何が必要なんだっけ？方位磁石？お菓子？あ、バナナが必須アイテムだって聞いたことがあるけれど、持っていくべきかしら。」

「・・・何やってんだ。」

途中から眺めていたアレックスがついに口を挟んでくる。

「何？・・・何って。明日の準備よ。」

「荷物はさっき確認までして、まとめたじゃないか。なんでまた散らかしてるんだよ。」

「だって、入れ忘れているものがなかったか心配で眠れなかったんだもの。だから確認しなおしているの。」

これを聞いたアレックスは何かに気づいたようで、目を細め、そして呆れたようにため息をついた。

「もういいだろう？そんなに心配しなくたって足りないものは俺のを使えばいいし、どうにでもなる。」

むうう。

わかってるわよ！

そんなことくらい！

ただ、最後の確認をしていただけじゃない。

そんな風に呆れた声で小さい子に言い聞かせるみたいに言わなくてもいいでしょ！

こんな心の中の不満が顔に現れていたのか、アレックスはくすつと苦笑いすると、その手を頭の上にのせた。

「いい子だから。今夜は早く寝てくれ。明日は朝が早いんだぞ。俺はもう少ししてから眠るから。いいな？」

不意打ちの優しい声に思考がストップし、思わずこくり、とうなずいてしまう。

それを見たアレックスは満足そうに微笑むとくしゅくしゅとあたしの髪の毛をかきまわした。

「おやすみ。いい夢見ろよ。」

そして、魔法の呪文を置いて闇の中に消えていった。

おやすみ。

今日はきつと素敵な夢を見られるわ。

14話・地平線との奮闘

次の日の朝は、日が昇るとともに宿を出た。

威勢のいい宿のおばさんは、「こんな細っこい体で生きていけるのかい？」とパンやらチーズやら果物やらなんだかたくさん持たせてくれた。

最後までとってもよくしてくれた人だったわ。

宿を出発してからというものの、私とアレックスはひたすら続く平坦な道を進んでいた。

この辺り一帯は牧場になっているみたいで、所々に牛が放されていてのんびりとした平野が広がっていた。

シルヴァンはここのゆったりとした雰囲気が入ったのか、トコトコと軽快に足を踏み鳴らしながら駆けている。

私かというと野宿なんていうからジャングルなんて言わないけれども、もっとスリリングな林とかを期待していたのに、実際に進んでみれば果てしなく続く大地と終わりの見えない道程にいささかうんざりしてきた。

斜め前を進むアレックスは、何を考えているのかよくわからないのだけれど、常に前を見据えて、淡々とセリーンの誘導を行っている。

はーあ・・・・・・・・。

なんだかつまらないわ。

今頃城にいたら何をしている時間かしら。

・・・そうね、世界史の先生の授業に飽きてしまつて、どうやって早く切り上げさせようかあれこれと模索している頃かしら。

・・・私つたら、なんてお転婆だったの。

ふと、以前の生活を振り返つてみて思ったことだった。

そうよね、『深窓の姫』なんていうものでは結婚が嫌で家出る、なんてこときつとしないわ。

もつとお淑やかな女の子に生まれるべきだったかしら。

そうしたら、国だって強国とコネが結べてこれから百年くらいの安泰は確定していたはずなのに。

でも。

それでも、私は自分の自由を選ぶわ！

だって「お国のために」なんてガラじゃないもの。

私はわたしのためにあるのよ！

それでも、一国の姫として、王女として、国が危機に直面する時は胸を張つて「わたくしの国を濫りに荒らすことは許しません。」つて言えるくらいの自覚と誇りは持っているつもり。

民のことは大好きだし、何にも変えられないくらい愛しているわ。

だけど、私は本当に大切なもの、王女としてではなく、私自身のために必要なものを見つけないの。

だから、それを手に入れるためには故郷を失うことだって厭わないのよ。

15話・ロゼの街

2日にわたる旅路には何の障害もなかった。

強いて言うならば、延々と同じ風景が続くことでまったく進んでいく気がしなかったことかしら。

それはさて置き。

ようやく、ようやくロゼに着いた。

やっと地平線から逃れられるわー、とそこら辺を駆け回りたい気分なのだけれど、そうするとアレックスが白い目で見そうだ（いや、静かに離れていくかもしれない）から、とりあえず心の中に留めておく。

ロゼの街には思ったより早く着いて、今はまだ陽が少し西に傾き始めた頃だ。

ロゼの街に着いて早々、今晚泊まる宿をとり、アレックスはそのままどこか行ってしまった。

夕飯までには戻ると言っていたのだけれど、どこに行ったのかしら。

そんなわけで私は今手持ち無沙汰で、宿の部屋でばけーっと街の様子を眺めている。

別に街に下りてもよかったのだけれど、アレックスがいなくなんだかすべてが色褪せたように見えてしまって、結局部屋の中にとどまることにした。

「それにしても。なんだか騒がしいわね。」

そうなのだ。

街に入ってすぐに気がついたことなのだが、なんだか街全体が騒がしいのだ。

実際にうるさいというわけではない。

街には活気があり、とてもにぎわっているが、どこか違和感がある。それが『騒がしい』の原因なのだろう。

街全体がざわざわとしていて落ち着きがない。

「・・・あら？」

ふと、窓の外を見ていて気がついた。

近衛騎士がいるわ。

どうして？

近衛騎士団は王直属の騎士団めつたに王都を出て地方に赴くことはないのに。

——・・・まさかっ!？

ある考えが頭を過ぎり、急いで階下へ降りる。

はあはあと切れる息を落ち着かせながら、宿の給士に話しかけた。

「こんにちは。今日はなんだか騒がしいわね。近衛騎士が来ているみたいだけれど、何かあったの？」

すると、その給士は少し声をひそめてこう言った。

「なんでも王女様が行方不明になられたようで。それで騎士団の方々が探しにいられているみたいですよ。街では王女様は誘拐されたのではないか、ともつばらの噂になっております。ただ、王女さまはご存知のとおり姿絵を好んでいらつしやらないでしょう？様々な地方を歩き渡っている商人はともかく、ロゼの民は王都での式典などで遠くから王女様を拝見したことがある者がいるかどうか。ですので、騎士団での搜索は難航しているようですね。」

なんということ！

父様の追っ手がもうこんなところまで来ているなんて！

どうしましょう！

16話・分身との決別

その後の私の行動はすばやかだった。

給仕の話を聞いた私はまず散髪屋に行った。

途中巡回中の近衛とすれ違ったたび、マントのフードを目深にかぶり、ドキドキしながらしのいだ。

お金はいくばくかの硬貨をアレックスからもらっていたので心配はない。

そして、やっとの思いでたどり着いた散髪屋でお尻の辺りまであった髪を胸まで切った。

その上、髪の色を目立たない茶色に染め上げる。

ハニーブロンドで、城に居た頃は侍女たちが口をそろえて「勿体無くて切りきれませんわ」と散髪を渋っていた自慢の髪。

私もお母様ゆずりの豊かな髪をとても気に入っていたのだけれど、自分の将来と引き換えに失うことには少しも躊躇いはなかった。

ただ、やはり切られた髪がはらはらと床に落ちていく光景を見たときは、自分の分身が切り離されているように感じて、妙に悲しくなってしまった。

「アレックス、お願い。すぐにこの街を出しましょう?」

日がだいぶ西に傾いた頃、宿に帰ってきたアレックスは悲壮な顔をして訴える私に、そしてなにより、すっかり変わってしまった私の姿に驚き目を見張った。

「おま・・・っ! どうしたんだ、その髪は!?!」

ああ、もう!

そんなこと、今はどうでもいいのよ!

はやく、はやくこの街を離れないと、すぐにでも私は捕まってしまうわ。

近衛騎士団は王直属の精鋭部隊。

他の騎士団が行う国境や地方の守備や、紛争地への派遣などにはめったなことでは赴かないが、代わりに王族の護衛、秘密裏での暗躍が主な任務となっている。

もちろん、私にもリチャードという騎士が護衛についていた。

小さい頃から傍にいたリチャードは、私にとってもかけがえのない人で、彼に黙って城を抜け出したことは今でも悔やんでいる。

そんな彼のことだ。

ここに近衛騎士がいるということは、リチャードがいはいはずがないだろう。

もちろん、私をみすみす行方不明にさせてしまったため、ということでもあるのだろうが、責任感の強い彼のことだから、きっと心配して自分を責め、必死になって私を捜していることだろう。

そんな彼に、いくら外見を少しばかり変えたからといって見つからないわけではない。

一瞬でも彼の視界に止まってしまったら、私はきっとその数時間後には城にたどり着いていることだろう。

だから。

だから、はやく。

「お願い、アレックス。一刻も早く、この街を離れたいの。」

重ねた言葉に、アレックスは一瞬躊躇の表情を見せたが、その後に軽く頷き、こう言った。

「わかった。日が暮れる前に発つぞ。準備しろ。」

17話・国外逃亡

私たちは慌しく宿を発った。

日はすでにだいぶ傾いており、あと数刻で辺りは闇に包まれるだろう。

「本当に、いいのか。」

すでに何度も繰り返された問答。

私は同じように答える。

「いい。」

そして、きっとこれが最後になる。

ここ、ロゼの街は商業で有名な大きな街である。

同時に、『もつとも国境線の薄い街』とも呼ばれている。

それは、ロゼが国境の街であるというだけでなく、このパルティア王国と隣国シリア、ロマノフ王国、アルザス連邦国の三国が一同に接し、そして商業の活性化をはかるために商人たちが出入りをしやすいよう三国でロゼでの出入国の規制緩和を協定しているというところ由来している。

身元が確かで、自国からの信頼が厚いほどロゼへの出入りは簡単になり、そしてそれは出入国の際に確認される証明書にも星の数の多さで信頼度が人目でわかるように記載されているため、国からのお墨付きをもらった商家や大臣、貴族、官僚、そして、普通はあまり出入国審査所を通るようなことはないのも忘れがちになるが、各国の王族、首脳などに与えられているく　　>のものを提示すれば、ほぼ顔パスで出入りができるようになっている。

これから私たちが向かうことになるのは、パルティア王国。

アルザス連邦国へのゲートの周りには、なぜか多くの近衛騎士たちがうろつろつとしていたので、突破はむりそうだった。

一方で、国内で他の場所に逃げるということも考えたのだが、他の町や村への道にはすべて近衛騎士が配置されていたのでやむなく諦めた。

そして、冒頭にもどる。

「本当にいいのか？」

「…………アレックスってば、しつこい。」

「いいの！ほら、早く証明書提示しなさいよ！」

ゲートにたどり着いてまでも、再度確認するアレックス。

そんな彼にいい加減うんざりして、そっけなく証明書の提示を促す。

なぜ、アレックスが証明書を持っているのかって？

それはね、なんと彼、パルティア出身なのだそう。

それで旅の途中に証明書が必要になって、申請していたのですって。

なんて偶然！

そんなわけで、私の家出から発展した国外逃亡はあっさりと成功し
そうだった。

……が、事態はそんなに甘くはなかったわ。

「見つけたぞ！リチャード様っ！こちらですっ！」

ゲートにたどり着いたことで、気を緩めてしまったのがいけなかったのかしら。

家出の成功を確信した私をあざ笑うかのように、一人の近衛の声が
出国ゲート内で響いた。

17話・国外逃亡（後書き）

皆様、大分長い間更新を滞らせてしまつて、申し訳ありません。
放置していた訳ではないのですが、今年受験ということで、パソコンを触る時間すら惜しみながら勉強に励んでいます。ですので、これから来春まで、更新はできないと思います。無事終わりましたら、またマイペースに更新を再開させていただきますので、お楽しみくださっている読者のみなさまには大変申し訳ないですが、しばしお待ちくださいませ。

18話・ささやきが聞こえる距離（前書き）

お待たせしました。

18話・ささやきが聞こえる距離

「見つけたぞ！リチャード様っ！こちらですっ！」

その声が聞こえたのは、ちょうどゲートを潜り抜け、シリア王国との国境線を目の前にしていた時であった。

数秒前までは何の疑いもなく家出（国外逃走）の成功を確信していたため、自分の身に起きたことが一瞬理解できなかった。

「くそっ 見つかった！ティナ、シルヴァンに跨れ！早くっ！」

そう言々とアレックスは自身もセリンにひらりと跨ると国境線を目指して駆け出した。

私もあわててシルヴァンに跨ると、遅れをとらぬよう、急いでアレックスの後を追う。

数秒のち、リチャードも遅れてゲートに到着した。

「シリアの・・・っ！早く追え！」

そんなリチャードの怒号が背後から聞こえる。

・・・リチャードが怒鳴るところなんて、初めて聞いたわ。
私にはずっとやさしいお兄さんみたいな感じで接していて、お転婆
な私を叱るときも決してあんな風に怒鳴ったりはしなかった。

「ひめさま・・・っ」

リチャードの怒号を聞いたことで感傷に浸っていると、切羽詰まっ
たりリチャードの声が聞こえた。

それは、ささやくような、小さな声だった。

にも関わらず、私に聞こえたってことは、それだけリチャードが近
くにいてること。

気が付いたときには、リチャードは手を伸ばせば届きそうな距離に
いた。

「クリスティナっ」

少し先でアレックスが呼ぶのが聞こえる。

後ろではリチャードが私に向かって手を伸ばしてきていて……。

つかまる……っ！

そう思った瞬間のことだった。

「パルティア国王直営部隊近衛騎士団の方々。これから先は我がシリア国の領土にあり。ここを通過されるのならば、正式な手続きを通してからにしてください。」

そんな凜々しい声とともに、シリアの軍服を身にまとった兵士たちが、わたしたちの間を遮ったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8588h/>

シンデレラになれなくて

2011年6月16日09時15分発行